

## 教員養成大学・学部における研究と教育の両輪をどう考えるか

野崎 武司

私が40歳を少し超えたとき、香川大学教育学部は、全国に先駆けて香川県教育委員会と連携協定を結び、私は人事交流という位置付けで、近隣の小学校に＜研修＞に赴いた。わずか3ヶ月ばかりだったが、あのときの体験が今の私を形作っていると思う。

私の指導にあたられた小学校の先生は、私より2歳若い男性教諭だった。大規模公立小学校のPCルームの管理を担い、朝の会の校内テレビ放送を一手に掌握する＜できる先生＞だった。当時はあまり流布していなかった発達障害が疑われる子どもがクラスに2・3人はいて、いわば彼らの支援員といった立場でクラスの中にいた。総合の授業では折々地域の方々との打ち合わせがあり、ALTとも頻繁に授業の調整があった。数々の仕事の目まぐるしさに心底驚かされた。

大学では研修報告書を作成したが、ただそれだけ、といった印象だった。正直、学部教育とのギャップを感じ、数名の上司に話しはしたが、大学は学問の府だ、といった回答だった。以来、ずっと教員養成の改革に取り組んできたのだと思う。

昨今の大学改革では「教育と研究の両輪」という言葉が使われる。その真意を今ひとつ分かりかねている。一方では研究業績重視の教員評価は大学のミッションに応じたものではない、という。他方、教育と研究の軸足の置き方の異なる教員が連携し、相互の生産性をあげる、などともいわれる。あまり好きではないが、生産性という言葉を使うとすれば、教員養成のそれは、質の高い教員の養成と、質の高い教育研究の成果を上げることであると考え。私の長年の違和感は、この両者が分立していることにある。

大学はやはり学問の府であってほしいと思っている。しかしそこでの学術研究と、質の高い教員の養成が繋がらない。教職コアカリキュラムなどをはじめとして、教員養成の質保証は厳しく押し寄せる。ICTに関してはカリキュラムマップを示すよう通知が来たかと思えば、モデルマップが作られて下りてくる。こうした要請への適応には学術的な思考が働かない。ある意味作業量は増えるがそこに知性を働かせる余地がない。逆に大学本部は、研究業績を求めてくる。科研などの採択率を上げる活性化策を考えよという。教育と研究の分立としか言いようがない。

今の教員養成大学・学部には、教育と研究の両輪を活かして動かす土壤がないように感じる。全学の会議で工学系の成果を見ると驚かされる。博士課程や修士課程にたくさんの受験者が集まり、修了後は恵まれた進路へと進む。大学教員はもちろん多忙を極めているが、研究成果をあげ、それが人材養成とも繋がっている。こうしたことには JABEE などの大学改革の成果もあるのだろうが、最近感じるのは、ヒューリスティックな発見型や開発型の研究を受け入れ、重視し、それを価値づけ、体系づける学会のあり方だ。何かしら、「学問」のあり方そのものに、論点がありそうに感じている。複合社会の中で、何かしら不可能なことへチャレンジするような探究の精神がないところに、異なるものとの協働やダイバーシティの有用性などは生じるはずもない。

教員養成大学・学部が、学問の府として広く社会から敬意を集めるような存在となるために、何が必要なのか、何に取り組むべきか、ぜひ多くの議論を期待したい。

(香川大学教育学部長)